

南原遺跡

The Minamihara Site

1994

長岡市教育委員会

序

長岡市のほぼ中央を北へ流れる信濃川の左岸には、通称「関原丘陵」の河岸段丘が広がっています。この段丘上には、重要文化財の火焰土器を出土した馬高遺跡をはじめ、特異な蓋をもつ三十稻場式土器の三十稻場遺跡や、玉作り集落の藤橋遺跡など多数の縄文時代の集落跡が存在しています。本年度、発掘調査を行った南原遺跡も「関原丘陵」にある縄文時代中期の集落跡です。

この発掘調査は、公営住宅上除地の建替事業に伴うもので、信濃川文化の象徴とも言える火焰型土器や王冠型土器をはじめ、多数の土器や土偶それに石器などが出土しました。中でも超小型土偶の出土は、これから土偶の機能をめぐる研究に大いに役立つものと思います。また、今回の調査で出土した土器から、南原の集落は縄文時代中期全般という長い期間に渡って営まれていたことが分かるなど、貴重な成果を取ることができました。

そして、この発掘調査の成果が、馬高遺跡を中心とする関原丘陵における縄文時代中期の集落群の研究に役立つことを願っています。

最後になりましたが、調査に御協力をいただきました新潟県教育庁文化行政課をはじめ、発掘調査に御協力をいただきました皆さんに感謝申し上げます。

平成6年3月

長岡市教育委員会

教育長 大 西 厚 生

例　　言

- 1 本書は、公営上除住宅の建替事業に伴う南原遺跡発掘調査の記録である。
- 2 発掘調査は、長岡市教育委員会が主体となって、平成5年8月から11月に実施した。
- 3 調査の経費は、長岡市で予算処置をしたほか、国庫補助金及び新潟県からの委託金をもって充てた。
- 4 本書は、調査担当者及び調査員が分担して執筆し、小林がまとめた。

目　　次

I	発掘調査に至る経緯	1
II	遺跡の環境	2
III	発掘調査	3
1	グリットの設定	3
2	発掘調査の経過	3
IV	調査結果	5
1	上層序	5
2	遺構	5
3	遺物	11
V	まとめ	29

I 発掘調査に至る経緯

南原遺跡は、昭和33年の公営住宅の建設工事で削平されたものと思われていた。ところが、昭和60年頃に入居者が採集した縄文土器等を科学博物館に持ち込み、遺跡の一部が残存することが分かった。その後、公営上除住宅の建替事業が計画され、事業主管課の建築住宅課と遺跡の取り扱いについて協議を行い、遺跡の残存範囲や遺跡の内容等を確認する試掘調査を行い、遺跡の保存方法について再協議することにした。それを受けて平成3年に確認調査を実施し、住宅地内の約3500m²に縄文時代中期の遺構・遺物が分布することを確認した。そして、調査成果の内容から南原遺跡は、発掘調査を行って記録を保存することにし、工事計画に合わせて平成5年に発掘調査を実施した。

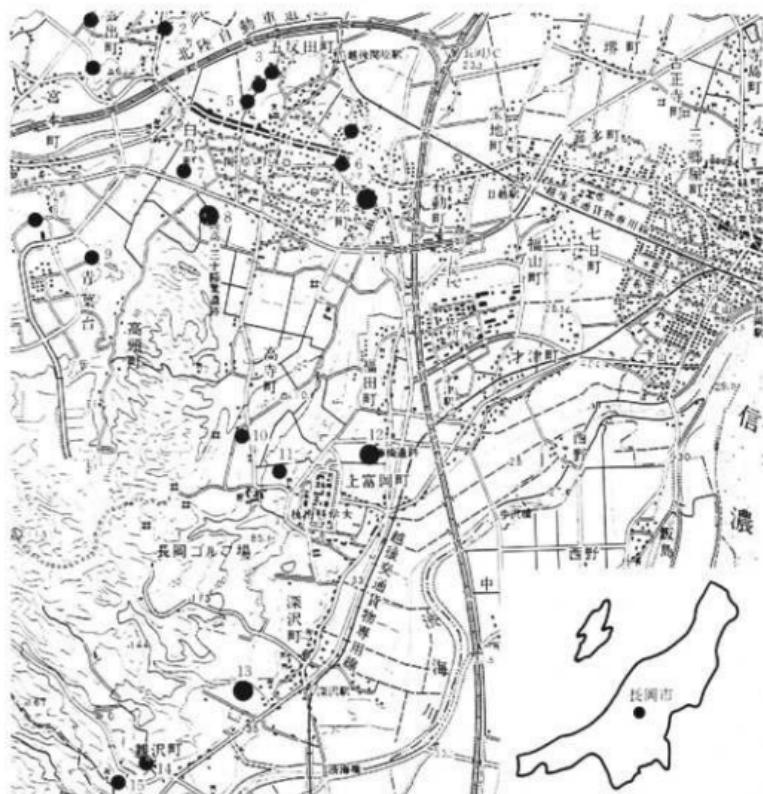


第1図 南原遺跡位置図 (1/5,000)

II 遺跡の環境（第1・2図）

南原遺跡は新潟県長岡市上除町字南原に所在する。長岡市は新潟県のはば中央部に位置し、長岡市の中央に信濃川が南から北へ流れ、市街地を東西に分けている。

この信濃川は、県境から中越地方までの中流域に数段の河岸段丘を発達させている。長岡市においては、左岸に高寺面、関原面、上富岡面、深沢面の4面があり、関原丘陵と通称されている。中でも上富岡面から上位の関原面には、広い平坦面の台地上に位置し、歴史時間が長く、多数の住居跡などの遺構が確認若しくは予測され、土偶などの呪術的な遺物を保有しているなど、大集落としての特徴を備えている縄文時代中期から後期の馬高・三十稻場遺跡（8）、同じ中期から後期の岩野原遺跡（13）、晩期の藤橋遺跡（12）を核として、中期の



第2図 南原遺跡周辺の縄文遺跡（1/5,000 長岡）

瓜割（3）、六右エ門清水（5）、転堂（6）、城扣（9）、松山（11）、箕山（14）、山王（15）、中期・後期の薬師堂（2）、鎌田山（7）、駒村（10）などの小規模遺跡が多数取り巻いている。多数の縄文集落が所在する関原丘陵一帯は、縄文時代中期以降において快適な生活環境であったことを示唆している。

南原遺跡もこの関原丘陵上の縄文集落群の一つで、標高約45mの関原面に位置している。遺跡の西側には、南から北へ流れる菖蒲川の小谷があり、南から延びてきた関原丘陵の東端を分けている。南原遺跡を馬の背にして、西は菖蒲川の谷に、東は信濃川の沖積地へ傾斜し、北はそのまま下がりながら新潟平野に続いている。南原遺跡の南で共同墓地との間に小さな沢が入り、遺跡南側の限界と思われる。遺跡地は公営上除住宅として開発されていた。

III 発掘調査

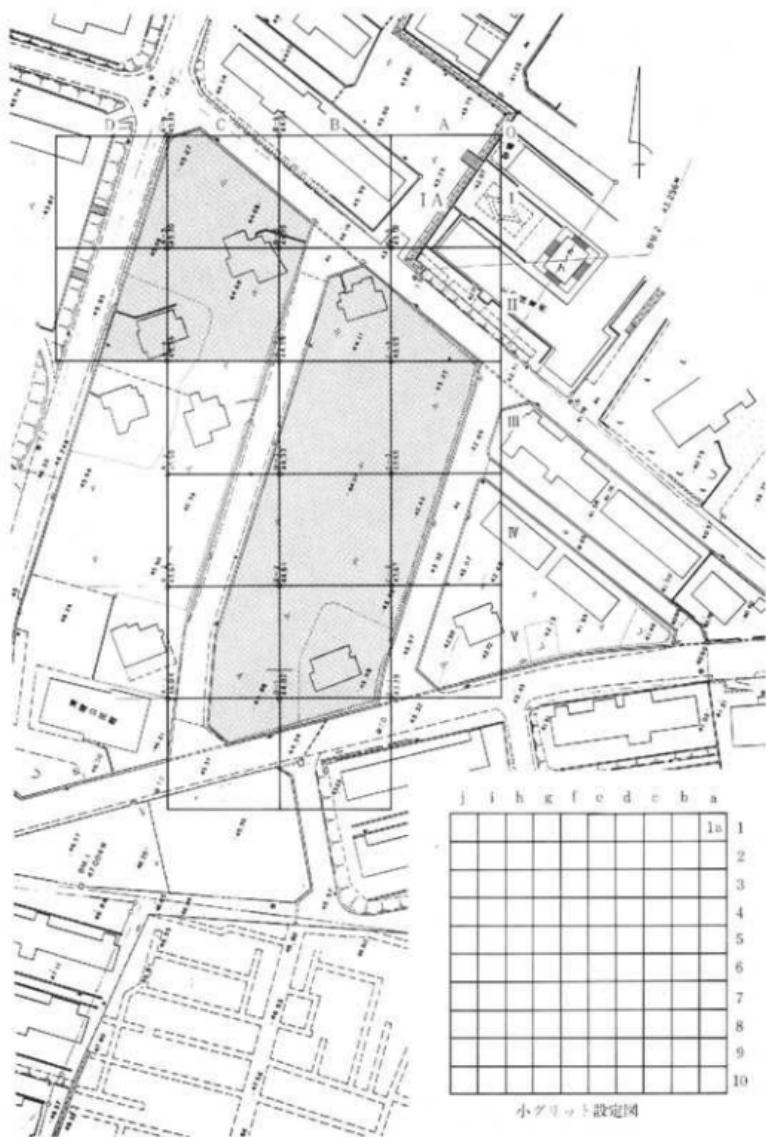
1 グリットの設定（第3図）

発掘調査のグリットは遺跡全体を覆うように設定した。グリット基本線は方位にそって20mおきに設置した。グリットは、調査区の北東に任意の原点（O）をおき、原点から東西をX軸、南北をY軸とした。グリットの区画は20m×20mを大グリット、大グリットをさらに2m×2mの区画に分けて小グリットとした。グリットの名称は大グリットのX軸をA・B……D、Y軸をI・II……VI、小グリットのX軸をa・b……j、Y軸を1・2……10の記号をつけ、III B-7 iなどと呼称した。

2 発掘調査の経過

8月2日に調査機材を搬入し、5日にガードフェンスの設置、小グリットの杭打ち、ベルトコンベヤーを設置することから調査を開始する。調査の手順は、①表土等の除去作業、②移植ゴテや竹べら等で包含層の発掘、③地表面をジョレンで発掘して遺構を確認、④遺構を半截して上層断面の状況を写真撮影・実測等で記録しながら発掘、⑤遺構及び調査地全体を写真撮影、⑥遺構及び調査地全体を平板で測量、の流れである。

調査開始から調査地北西側で次々とピット等を検出する。9月20日からはVI B-i・j、IV C-a～cの発掘に入り、遺物が集中して出土した。ここからは、約1.24t（全出土量の約60%）の土器が出土した。しかし、この地点からは遺構は検出されなかった。30日土器洗浄中に小型の土偶を発見する。土器片等に混入しての出土で、出土状況等は不明である。10月1日V C-6 cから石窯い炉を検出する。周辺のピットと合わせて住居跡と推定する。19日III B-7～8・d～eから河原石が詰まった集石遺構を検出する。集石遺構中に縄文土器片や打製石斧などの遺物が混じっており縄文時代中期の遺構と確認する。21日から11月5日まで調査区全体の遺構平面図作成等記録作業。8・9日の両日に調査機材、遺物を搬出し、延べ61日間にわたる現場での調査を終了した。



第3図 グリッド設定図 (1/1,000)

IV 調査結果

1 土層序（第4図）

発掘調査で確認された土層は、次のとおりである。

I₁層 褐色土+黄褐色土（現表土、疊混入）

I₂層 茶褐色土（盛土、褐色粒、疊混入）、1958年の住宅建設で整地の際の削平土であり、土層は擾乱されており、遺物がかなり多く混入していた。

これは、整地の際、I₂層の遺物包含層を削平し、盛土したため遺物が混入されたと考えられる。

II₁層 明黒褐色土（遺物包含層）、土に縛まりがあり、遺物を包含する。

II₂層 暗黒褐色土、粒子が細かく、土に縛まりがなく、遺物がわずかに包含する。

遺跡形成時の旧表土と考えられる。

III 層 黄褐色土（地山）

発掘後の地山面の地形をみると西側と南側が高く、北東に向かって傾斜し、調査地北東側が窪んでいる地形になっている。なお、遺物が集中して出土したVI B-i・j、IV C-a～cは少し窪地であった。

2 遺構（第5図）

発掘調査で確認された遺構は、調査地南東側での住居跡が1基、東側で集石遺構が1基、そして北西側でのピット群である。

(1)ピット群（第6図） 今回の調査で検出されたピット等は80基で、そのうち調査地北西側（I B・I C・I D・II C・II D）では72基確認され（以下「ピット群」とする）、その他に風倒木等と思われるものや穴が約90カ所あった。

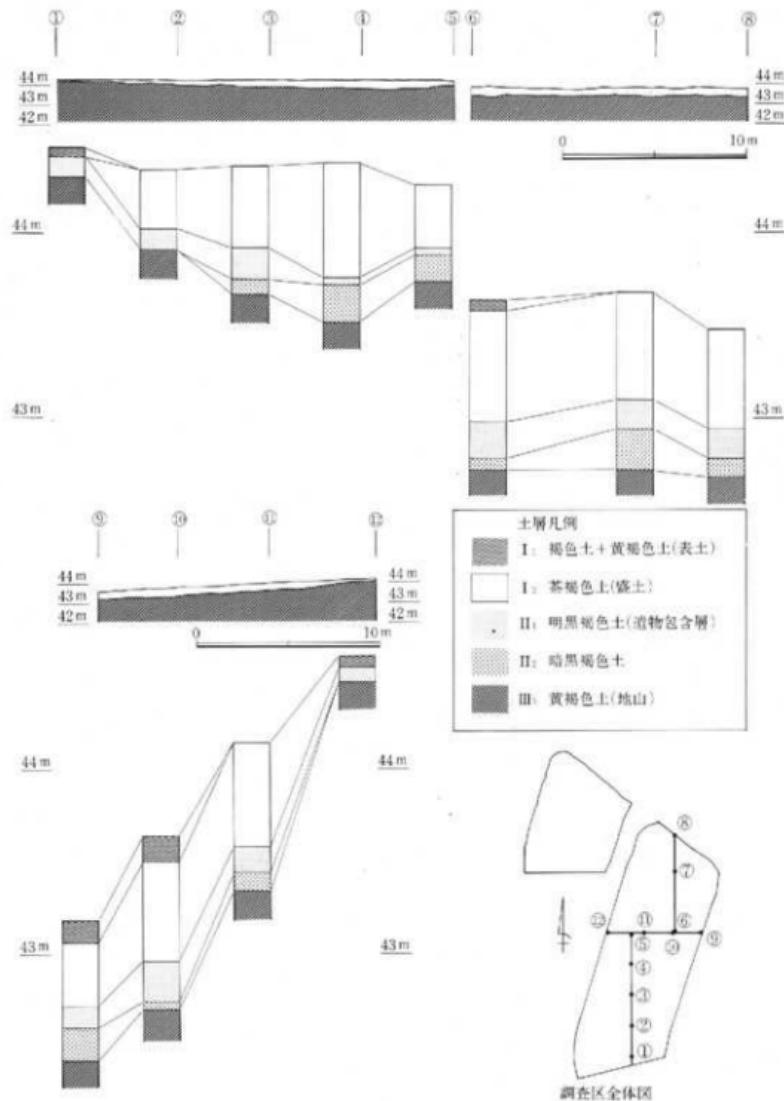
ピット群のやや中央に焼けた土の痕跡が確認された。周りには、直徑約20～30cm、深さ40～50cmの掘り方のしっかりしたピットが検出された（P 32・36・47・49・57）。これは、V Cで検出した住居跡の柱穴の規模とはほぼ同じであり、地床炉を中心とした住居跡があったと推定される。

また、SK28（直徑105cm、深さ20cm）とSK34（直徑120cm、深さ30cm）は、ともに直徑1m以上であり、覆土がレンズ状に堆積せず、地山土の黄褐色土等がブロック状に堆積し、炭化物が混じり、縄文土器、打製石斧（SK28のみ）が出土している。これは自然堆積でなく、明らかに人為堆積であるため、人骨等は出土しなかったが、土壙墓の可能性がある。

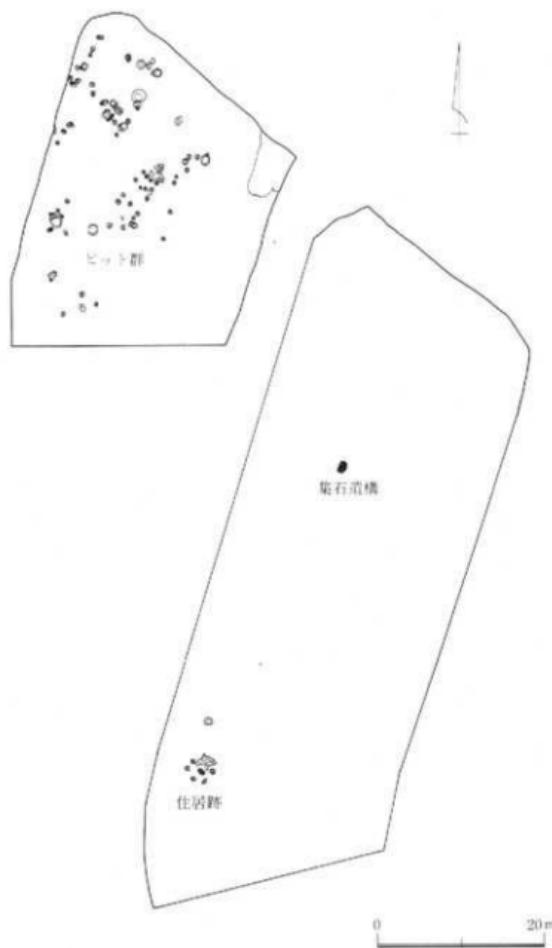
その他のピットからは、縄文土器や石器等出土し、P 25から磨製石斧と打製石斧が共伴した（写真25）。

ピット群南側のII C・Dでは、遺構は検出しなかった。

(2)住居跡（第7図） 今次調査で明確な形で確認される住居跡は、炉跡と周辺のピットで構成する1軒だけである。住居跡の検出位置は、土器や石器などが集中して出土した箇所の南側で、V C-5・7 b～dで、この付近の地形は、若干東へ傾斜していた。堅穴住居跡に



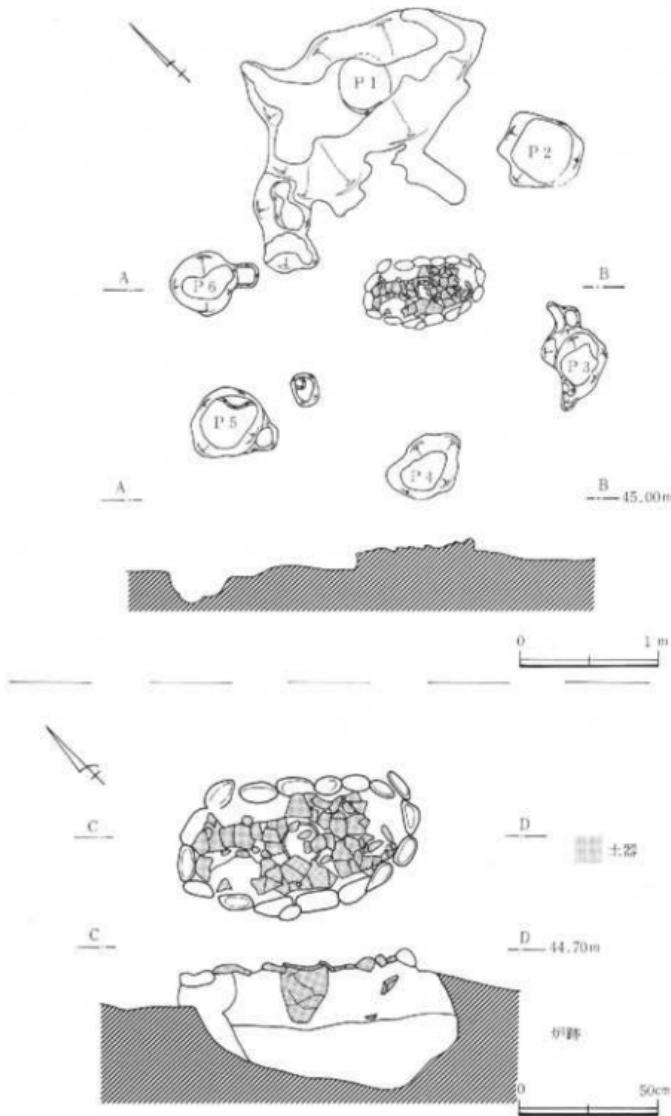
第4図 土層図



第5図 遺構全体図



第6図 ピット群平面図



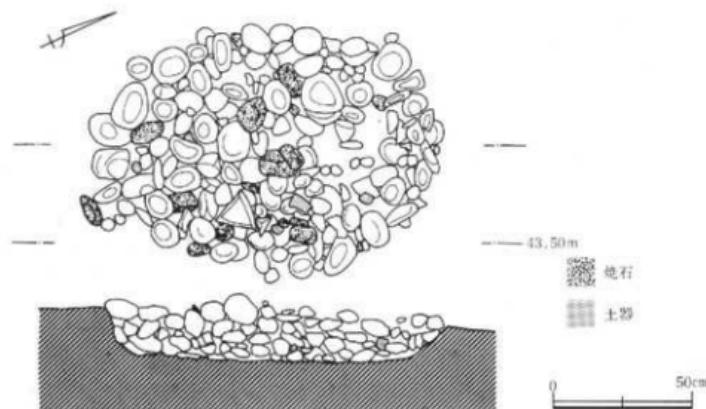
第7図 住居跡

普遍的な施設の周壁や周溝は確認されず、住居跡の平面形態は不明である。本住居跡は、平地式住居の可能性も指摘されるが、むしろ換出位置の地形や、南原遺跡から南へ約3kmにある岩野原遺跡（長岡市教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告書 岩野原遺跡』1981年）の縄文中期の住居跡は、竪穴住居跡が大半であることなどから、本住居跡は周壁・周溝が削平された竪穴住居跡であった可能性が高い。

本住居跡の炉は、長径約90cm、短径約50cmの梢円形に10cm内外の礫を並べ、ほぼ中央に埋甕があり、炉内には土器片を數いている。埋甕は、右下がりの斜行縄文を全面に施した粗製の深鉢土器（写真1-6）で、高さ約21cm、最大径約18cmを測る。炉内に敷かれた土器片は、縄文もしくは無文で時間を判読できるものはなかった。

炉跡周辺にP1からP6の6本以外にピットではなく、この6本のピットが住居跡を構成する柱穴とみなした。柱穴は直径約40~50cm、深さ約30cm前後の規模で、円に近い不整形を呈している。P2~P5の柱間距離位置から本住居跡の規模は、約3.5m以上と推測される。

(3)集石遺構（第8図） 長径約1.3m、短径約90cm、深さ約15cmの皿状のピットに小石から15cmほどの河原石までが詰まった遺構が、遺物集中箇所のIII B-7~8・d~eに位置していた。適切な名称が見当たらないため、仮に「集石遺構」とした。集石遺構には、焼けた石も含まれているが、その数は全体量としては少ない。ピットに焼いた石を使って調理する料理法もあるが、焼けた石が少ないとてもその可能性は低い。遺物集中箇所の底面に位置する集石遺構の性格については、今後の課題としたい。なお、集石遺構には、礫に混じって土器片、打製石斧1、磨石2、閃石3、石皿1があり、このことも含めて考えたい。



第8図 集石遺構

3 遺物

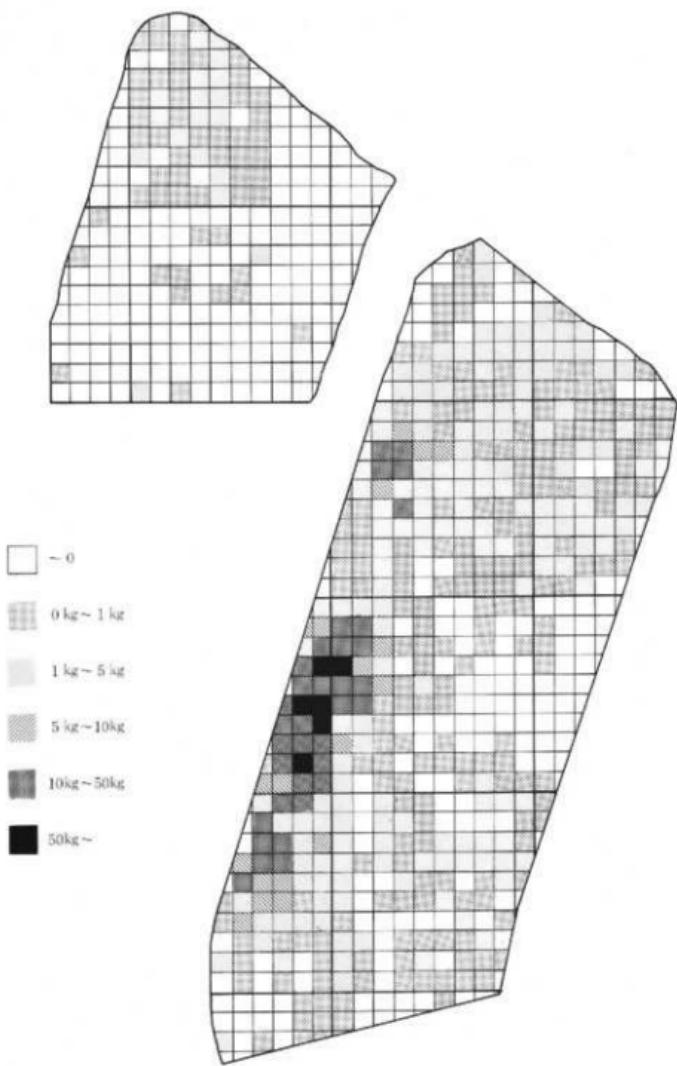
(1)土器（写真1～16） 繩文時代中期の土器が約13万点（総重量約2.45t）出土した。特にⅣB-i・jからⅣC-a～cにかけて集中して出土した（第9図）。

中期前葉の土器は、在地の剣野E式、北陸の新保・新崎式土器、東北の大木7b式、関東・信州系がある。41は斜格子目の沈線をもつ剣野E式である。新保・新崎式土器は、蓮華文（42・43）、爪形文（18～25）および爪形文の胴部文様の格子目文（32～34）と、繩文の地文上に平行沈線を描くもの（29～31）がある。19は地文に撚糸文を施している。また、40は波状口縁に刻みがあり、半隆起線列が施されているため新崎式と考えられる。大木7b式は、35～38の撚糸側面圧痕文、46の上下方向の交互刺突による鋸歯状文のあるもの、48の刺突と隆起線が組合わさるものがある。関東・信州系の土器は、大木7b式並行のもので15・44・45・47がある。15・45は勝坂式、焼町系の要素がある土器で環状突起をもち、三爻状の隆帯に刻みが施され、色調は、黒っぽく、胎土は粗い。44は把手をもち、半隆起線に沿って施された刻目、上下方向の交互刺突による鋸歯状文が施されている。47は、隆起線による文様で沈線部に刻みが施され、三角形の陰刻がある。また、有孔鉢付土器の有孔部分の破片（49～51）がある。なお、中期前葉～中葉にかけての土器は、1・4・39・53～60がある。1は胴部文様に新保・新崎系土器の影響が残っており火焔型土器の古いタイプと考えられ、4は口縁に円形突起が付き、頸部には平行沈線を巡らし、胴部は繩文のみが施されている。いずれも大木7b～8aに並行する土器である。

中期中葉の土器は、在地の火焔型土器と東北の大木様式（8a・8b式）がある。火焔型土器は3・61～81で、いずれも大木8a式に並行する。3は火焔型土器の中でもやや古いもので、66～68は鶴頭冠状把手の破片、70～73は口縁の鋸歯状の突起の破片、69・74～76は、胴部の破片、77～81は王冠型土器の口縁である。天神山式の影響をうけた82～85は隆線（端部で渦を巻き斜行する）を中心にして半隆起線文を引き回してつけた文様で大木8a式に並行する。大木8a式は2・7・13があり、2は波状口縁で繩文上にクランク状の沈線文、7は平口縁で繩文上にクランク文、13は大型の4単位の把手口縁で繩文上にクランク文、波状沈線文が施されている。大木8b式は、8・52・86～95である。8は曲線的な沈線文で小形深鉢土器、52は橋状突起をもつ小型深鉢土器、86～95は渦巻文をもち矢羽状沈線、綾杉文、縱方向の沈線が施されている。このほかの中葉の土器は5・96～102である。5は、口縁と胴部中央に横に区切る沈線がある深鉢で、96～100は繩文の地文の上に半截竹管による半隆起線文が施されている。

中期後葉の土器は103～104は隆帯を連続押圧していることから中期後葉と考えられる。

その他の土器として、口縁の縁に沈線で胴部は繩文のみを施したもの（10）、繩文のみを施した深鉢（6・11・12・14・17）と浅鉢（16）、無文の浅鉢（9）がある。



第9図 土器出土分布図



写真1 出土遺物①（土器）(1/4)

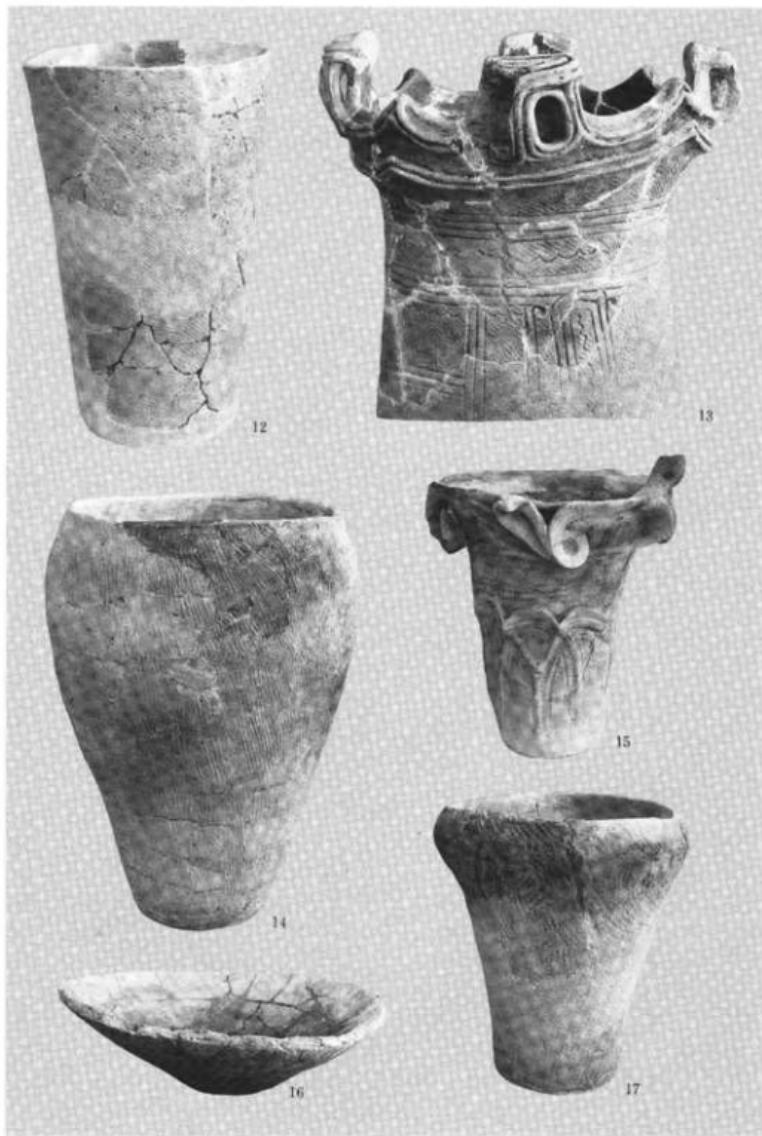


写真2 出土遺物②(土器)(1/6)

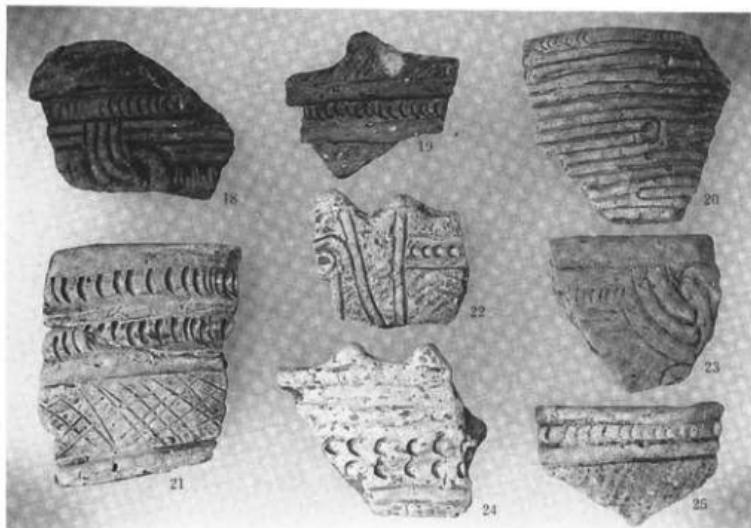


写真3 出土遺物③（土器）



写真4 出土遺物④（土器）

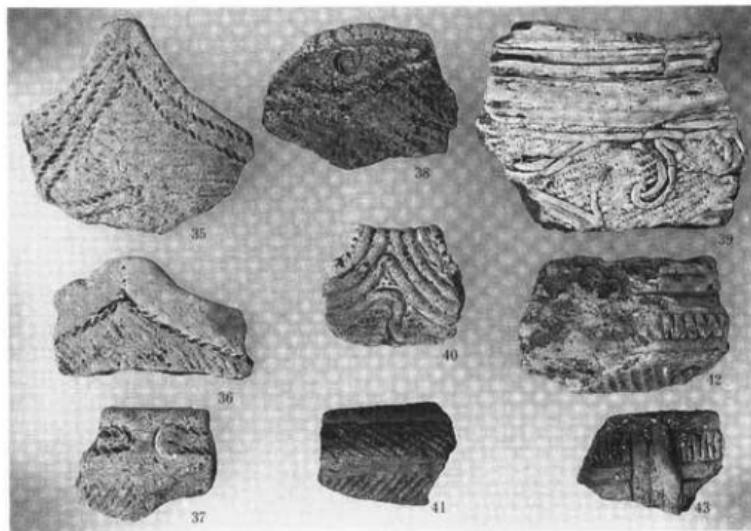


写真5 出土遺物⑤（土器）

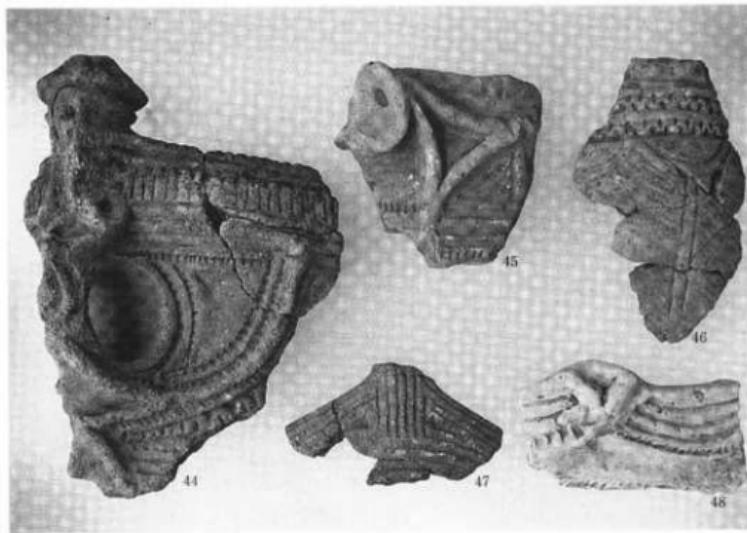


写真6 出土遺物⑥（土器）



写真7 出土遺物⑦（土器）

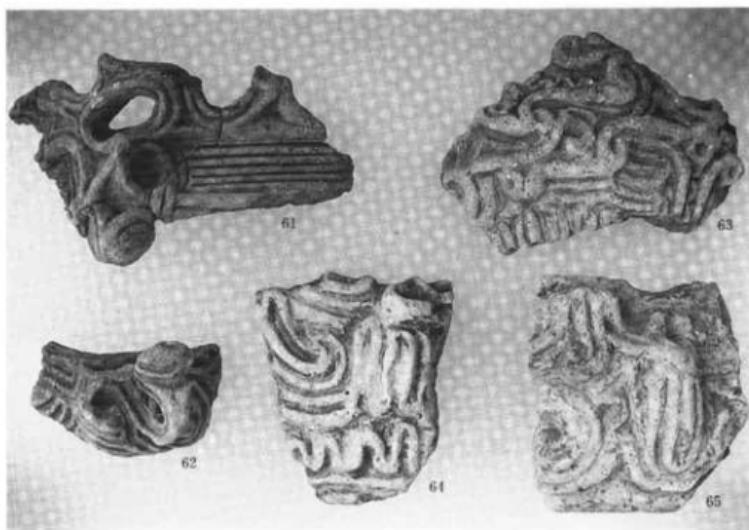


写真8 出土遺物⑧（土器）

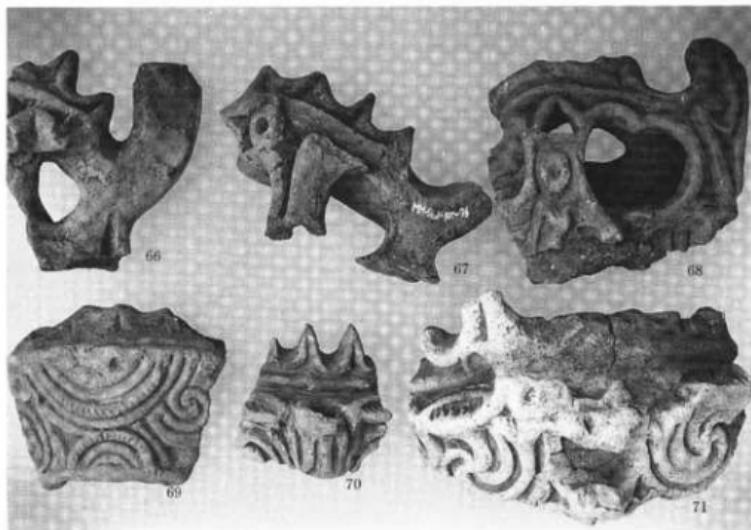


写真9 出土遺物⑨（土器）

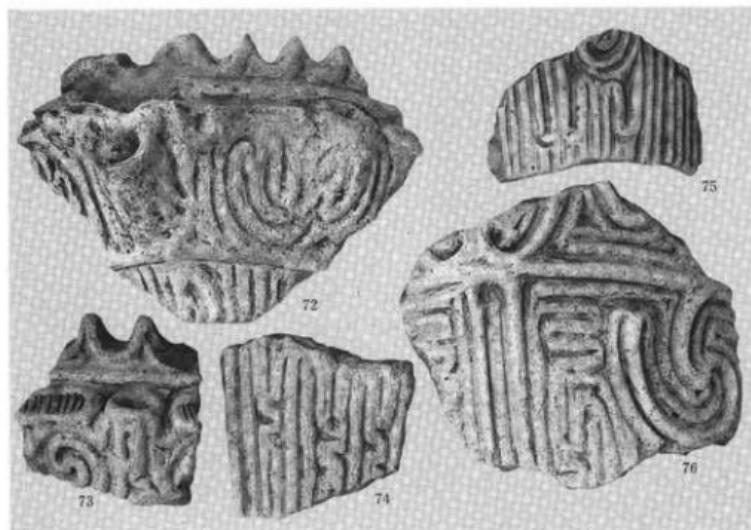


写真10 出土遺物⑩（土器）

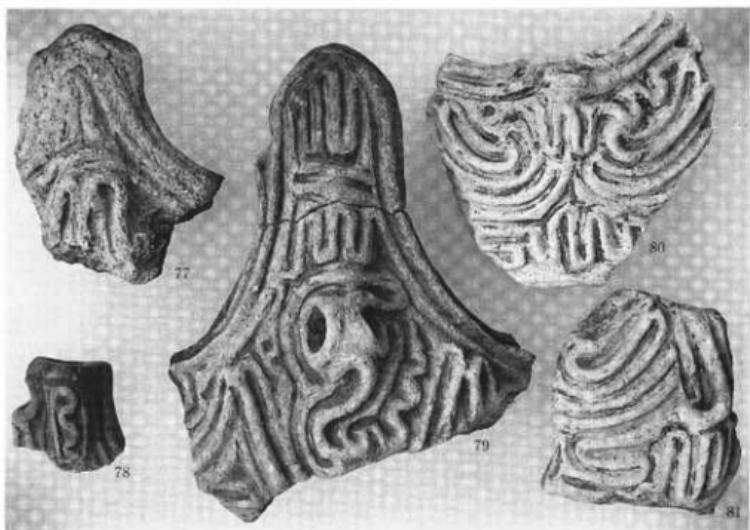


写真11 出土遺物⑪（土器）

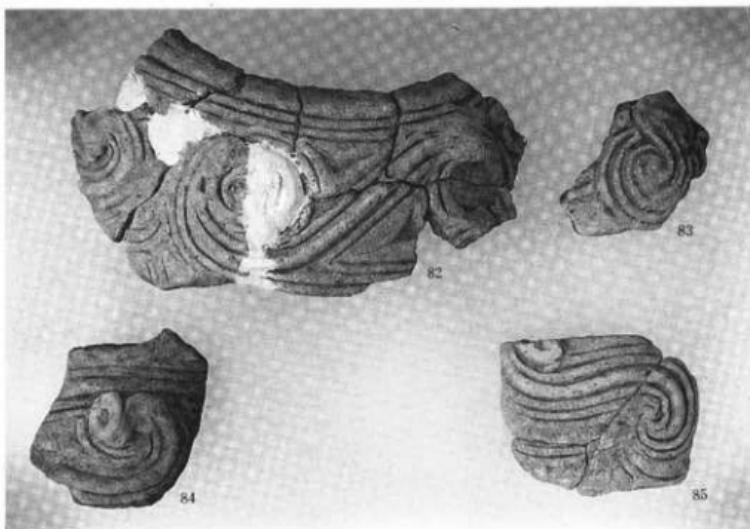


写真12 出土遺物⑫（土器）

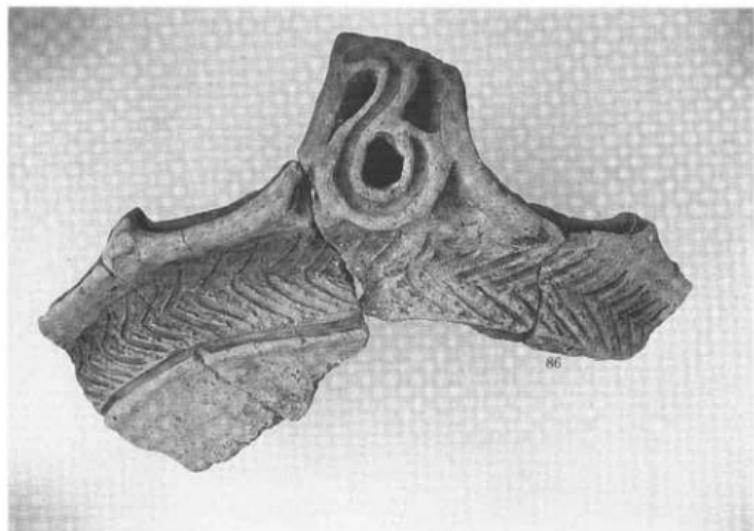


写真13 出土遺物⑬（土器）



写真14 出土遺物⑭（土器）

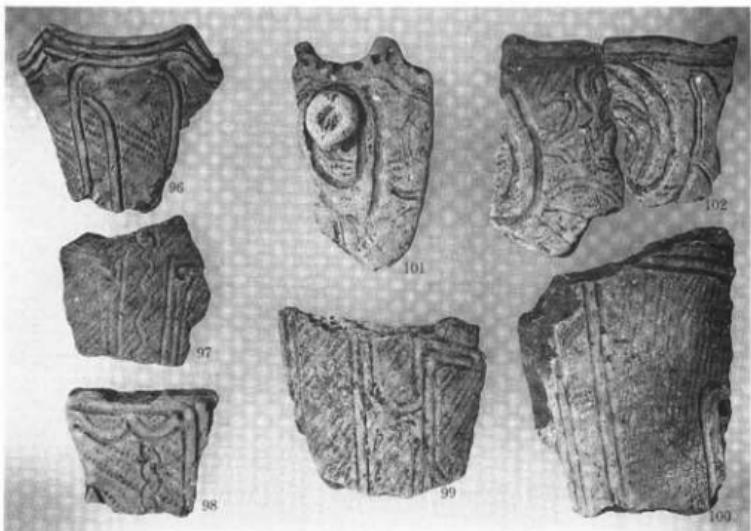
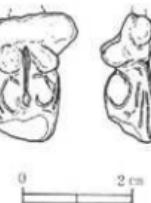


写真15 出土遺物⑨（土器）



写真16 出土遺物⑩（土器）

(2)土製品（第10図　写真17・18）　　今次調査での土製品は、土偶が20点（当初カウント時は20点であったが、腹部1点と胸部破片2点が接合され、現計18点）、三角形土製品21点、土製耳飾り19点が出土している。出土位置は、縄文土器や石器などが多く出土した地点に集中しており、そこだけで土偶が10点（55%）、三角形土製品が12点（57%）、土製耳飾り14点（74%）と、大半を占めている（第11図）。遺構に伴う土製品は、三角形土製品が住居跡検出位置から1点出土しただけである。



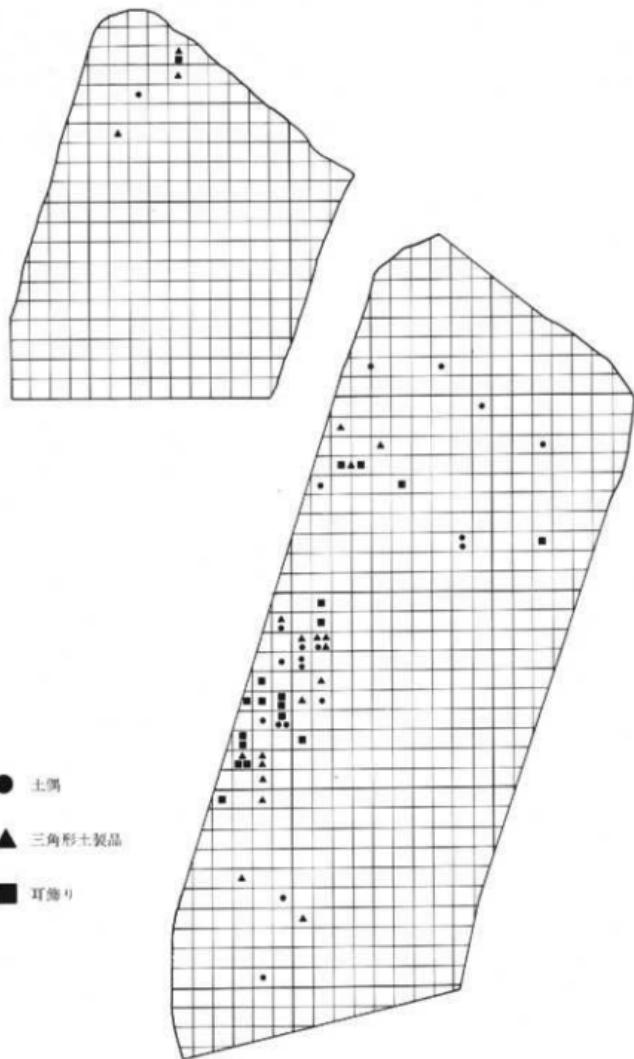
第10図　土偶

土偶（第10図　写真17）　新潟県内の縄文時代中期の土偶は、頭部が皿形を呈する河童形土偶がほとんどで、河童形土偶には胸部から腹部が板状で、脚部を省略するAタイプと、腹部が膨らみ、臀部が張り出す出尻のBタイプがある（駒形敏朗「新潟県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集 1992年）。南原の土偶はAタイプがほとんどで、腹部が膨らみ出尻のBタイプに近いのは、第10図と写真17-9の2点だけである。いずれも背中がやや湾曲するだけである。第10図の土偶（IV C-2-a出土）は、肩から腹部までの土偶で、全長23mm、腹部幅が13mmの小型品である。胸部には豊かな乳房がつき、乳房の間から窪む胸に向かって正中線が一本通り、膨らんでいる腹部を開むように沈線が描かれている。なお、頭部は欠損しているように観察されるが、製作時から頭部を欠いているとの意見もある。また、脚部は臀部から腹部にかけての観察から、省略若しくは簡略化したものと見られる。本土偶は、遺物整理中に発見されたもので、出土状況は遺物集中箇所の包含層出土以外には、不詳である。南原の土偶は、全長を窺い知るものはないが、それと比較してもこの小型土偶は、少なくとも縄文中期土偶の中では類例がないほどに極端に小さい。この超小型土偶の属性は、これまでの豊饒・安産・再生などの外に求めるべきものか、今後の課題である。

土製耳飾り（写真18-2～12）　　土製耳飾りは、直径約20～40mm、厚さ約10mm前後の大さで、中央に穴のない鼓形が1点のほかは、穴のある滑車形である。滑車形のうち、大型の3点は朱彩されている。

三角形土製品（写真18-13～20）　　ほぼ二等辺三角形を呈する土製品で、肩を中心とし、点と沈線で文様を描いているものがほとんどで、無文は3点である。また、肩がタスキ状に隆起しているのが2点（14・19）出土している。

（3）玦状耳飾り（写真18-1）　　縄文前期後葉の玦状耳飾り（蛇紋岩製）がIII A-8-hから1点出土している。両面から穿孔及び切り込みの痕跡が見られる。玦状耳飾りは、北陸地方の縄文前期に特有の遺物であるが、南原からは前期の土器は現在整理中であるが、いまところ確認されていない。今後、この玦状耳飾りを残した縄文前期後葉の集団が南原に所在したのか、あるいは南原の近くに所在していたのかを、確認する調査の必要が出てきた。



第11図 土製品出土分布図



写真17 出土遺物⑩（土偶）

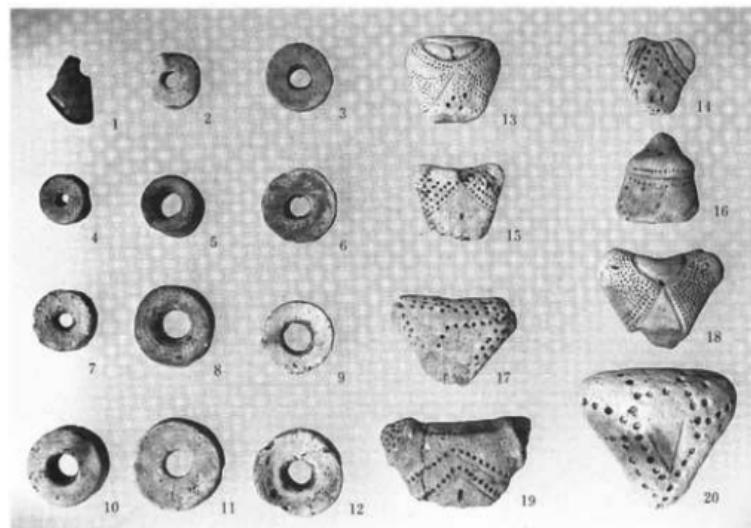


写真18 出土遺物⑪（珠状耳飾り、土製耳飾り、三角形土製品）

(4)石器・石製品（第12図 写真19～22） 石器及び石製品は、土器と同じくⅣB-1～10 i・j からⅣC-1～10a～cにかけて集中的に出土した。それ以外のところでは、集中箇所から北東側のII・III、A・Bが集中箇所に次ぐ数量が出土し、他は散発的な出土であった（第12図）。

名称・数	状 態	形 態
打製 223	完形品 47	橢形28、短冊形19
	欠損品 30	
	未製品 144	橢形50、短冊形79、不明15
磨製 57	完形品 2	
	略完形 9	
	欠損品 42	
石錐 1	完形品 1	
石鎌 18	完形品 8	円基13、平基3、円基2
	略完形 1	
	欠損品 8	
石鍤 5	完形品 2	
	未製品 3	
門石 47	完形品 45	
	欠損品 2	
磨石 33		
石皿 38	完形品 18	
	略完形 2	
	欠損品 18	
石匙 5	完形品 3	縦形5
	欠損品 2	
叩石 2	欠損品 2	
石棒 3	欠損品 3	

未製品が合わせて223点と群を抜いて多量に出土し、南原で打製石斧を生産していたのではと思われるほどである。磨製石斧の中で、写真20-8は刃部が斜めの斜刃石斧で、2は擦切技法によって製作されている。

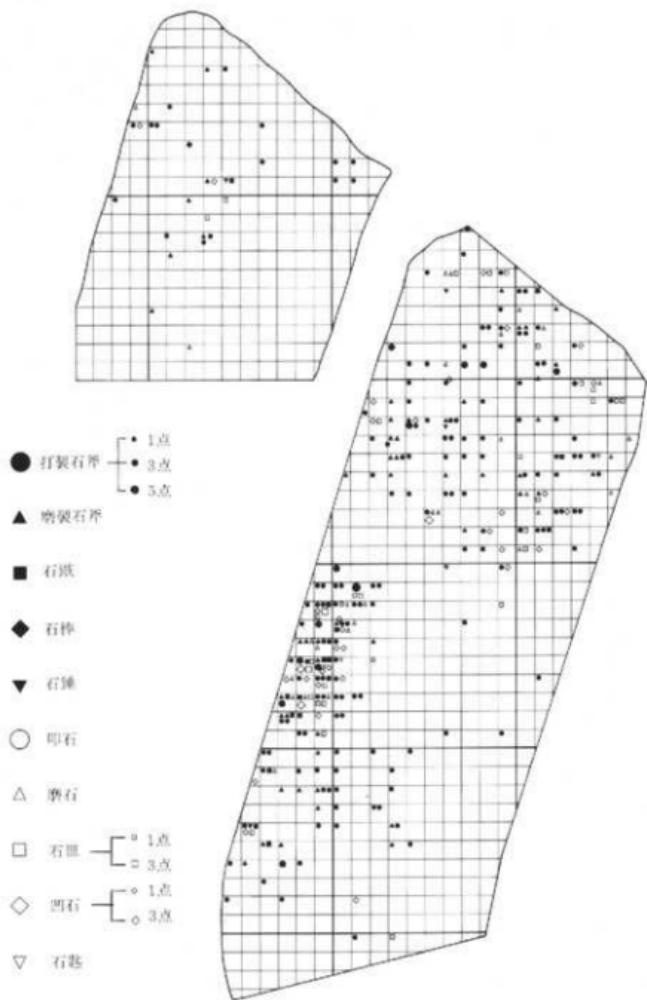
石鎌は平基・円基がごく少量のほか、脚部が長い凹基がほとんどで、凸基の石鎌が1点もなかった。凸基の石鎌がないことと、打製石斧が多量に出土していることなどは、長岡市深沢町岩野原遺跡（長岡市『長岡市史 資料編1 考古』1992年）と同じ傾向である。

呪術的な道具の石棒（写真22-3～5）は、5のように胸部の直径が12cm以上の太くて大形品で、該期の特徴を備えている。5の頭部には打ち出しによるモチーフが描かれている。

石器・石製品の種別及び数量等は左表の通りである。

南原から出土した石器の種類は、工具の打製石斧（写真19）・磨製石斧（写真20、写真21-11）や石錐（写真21-12）、狩猟具の石鎌（写真21-1～10）、漁労具の石鍤（写真22-1・2）、調理具の門石・磨石・石皿・石匙（写真21-13・14）、叩石と、一定の種類があり、南原が一般的な縄文時代中期の集落であることを物語っている。だが、漁労具の石鍤が5点と少なく、南原では漁労が盛んでなかっと思われる。代わって門石・磨石・石皿など植物性食料の調理にかかわる道具類が一定量出土しており、当時の生業が植物性食料に依存していたことを示唆している。

また、打製石斧が完形品と欠損品、



第12図 石器出土分布図

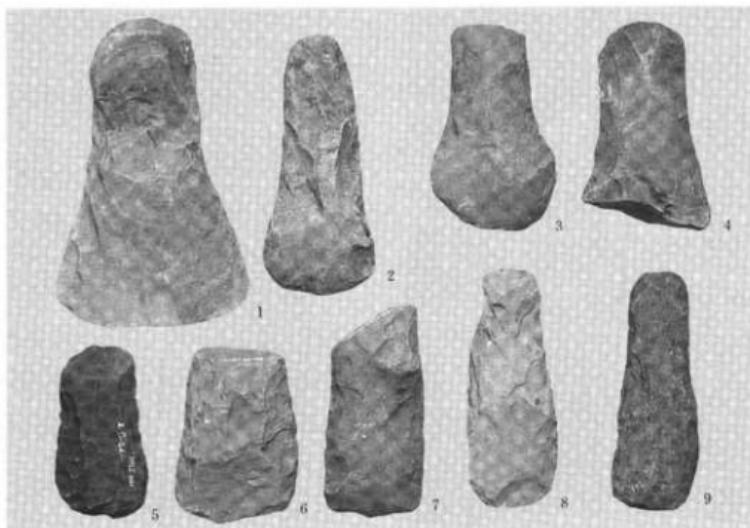


写真19 出土遺物⑩（打製石斧）

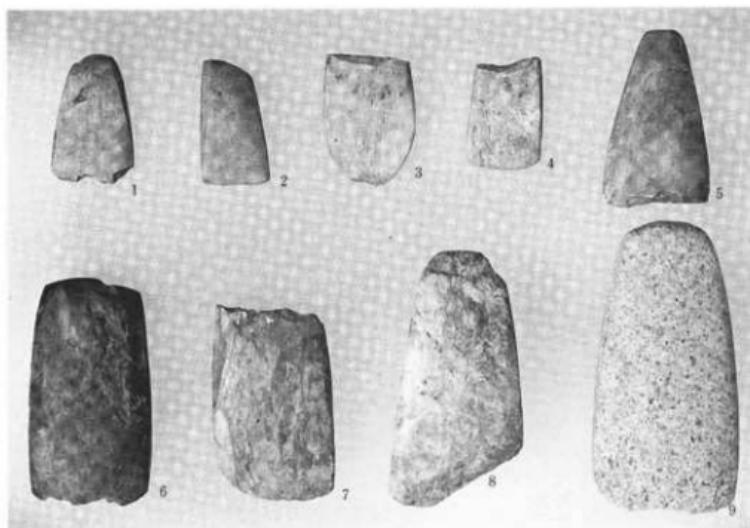


写真20 出土遺物⑪（磨製石斧）

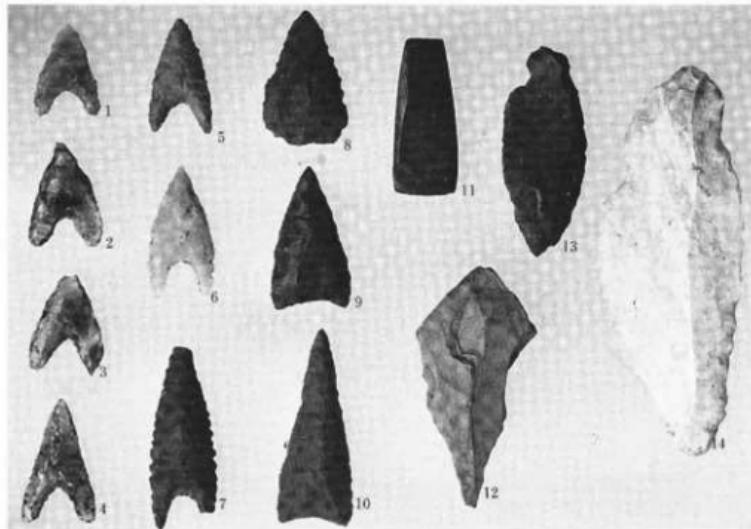


写真21 出土遺物②（石鏃、磨製石斧、石錐、石匙）

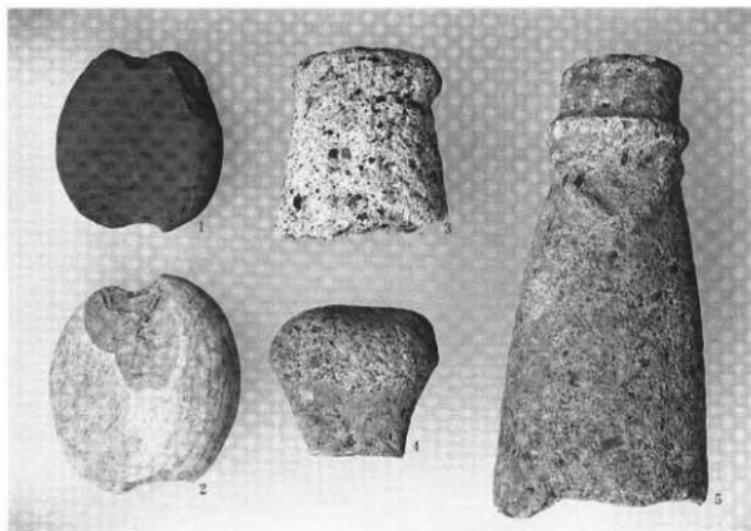


写真22 出土遺物③（石錘、石棒）

V まとめ

今次調査で検出した遺構としては、調査地の南東側で住居跡が1棟、東側で集石遺構が1カ所、それに北西側での住居跡の柱穴や土壤墓らしいものを含むビット群が位置していた。遺物は、火焰型土器をはじめ、超小型土偶、多量の打製石斧など多種多数の道具類が出土した。今次調査の成果から、昭和33年の公営住宅の建設で大半が削平された南原の集落跡の一端がうかがえる資料が得られた。次に調査の成果から南原遺跡の性格等を検討する。

住居跡が1棟であるが存在すること、平成3年の試掘調査で地床がらしい痕跡が今次調査地のビット群の中で存在していること、およびビット群の中に竪穴式住居の柱穴と思われるビットが多數あることなどから、南原は集落であったと思われる。なお、小石から拳大の礫が集中していた集石遺構は、縄文中期の土器が数点含まれており、集落形成期の一つの施設と考えられるが、他に類例がなくその性格は不明である。今後の課題としたい。

南原に集落が営まれていた時期及び期間は、出土土器から縄文時代中期初頭から後葉までの中期全般にわたっている。なお、縄文前期後葉の玦状耳飾りが1点出土しているが、前期の土器は現段階では確認されていない。玦状耳飾りは土壤墓に副葬されることもあり、前期後葉の段階では、南原に集落を構えず、他所にある集落の墓地として南原が利用されたことも考えられる。だが、南原遺跡の周辺には縄文前期の集落跡は確認されておらず、この点は今後の遺跡分布調査等で確認していきたい。

遺物は、ⅣB-i・jからⅣC-a～cにかけて集中しており、全体出土量の約60%を占めている。この付近から北東側の傾斜地に遺物の出土分布が偏り、この付近が岩野原遺跡の縄文中期集落域に見られた土器捨て場と同じ性格をもつものと考えられる。

土器以外の遺物は、石鏃、石匙、打製・磨製石斧、石錘などの工具、凹石、磨石、石皿などの調理具、土偶や石棒などの呪術的な道具が多種多数出土しており、南原が縄文人の生活根据とした集落であることを裏付けている。中でも、打製石斧が完形品・欠損品を含めて70点以上、及び未製品が150点近く出土していることは、この南原で打製石斧の生産が行われていた可能性を示唆している。

また、土偶が超小型土偶を含めて18点出土している。長岡市内における縄文中期の遺跡で、土偶を10点以上出土しているのは、岩野原と馬高の2遺跡である。約2万m²の縄文中期集落域全体を発掘した岩野原からは42点が出土している。土偶の出土点数と調査面積を比較した場合、削平されたとは言え、南原は多數の土偶を保有していたものと推測できる。

土偶の保有量や集落の経営時間の長さなどから南原は、岩野原や馬高などと同じくかつては2万m²を超える大規模な集落であった可能性が高い。また、調査地が北東へ傾斜し、そこが土器捨て場と思われることなどから、調査地は集落の東端にあたると考えられる。



遺跡全体



遺跡近景（IV C付近 西より）



調査風景



調査風景（IV C付近 南より）



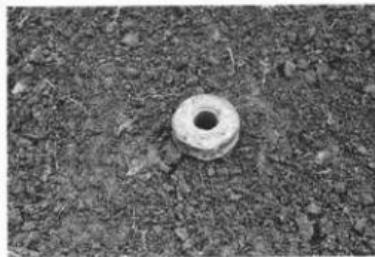
調査風景（II B付近 西より）



調査風景（調査地北西側 ピット群）



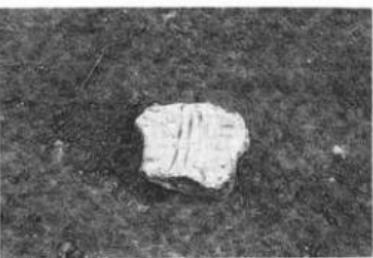
石棒出土状況



土製耳飾り出土状況



土偶出土状况



土偶出土状况



三角形土製品出土状况



土器出土状况



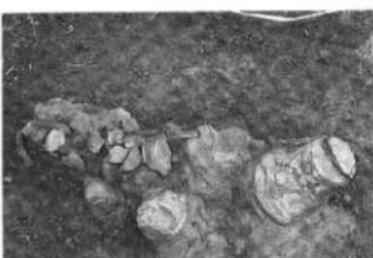
土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况

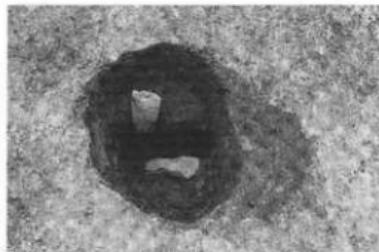


土器出土状况

写真24



ピット群（西から）



P25打製石斧、磨製石斧出土状況



住居跡（西から）



住居跡（南から）



炉跡（東から）



炉跡断面（北から）



集石遺構（東から）



集石遺構断面（東から）

調査体制

調査主体者 長岡市教育委員会（教育長 大西厚生）

調査担当者 駒形敏朗（長岡市教育委員会社会教育課）

調査員 小林伸治（　同　　上　　）

調査補助員 神林昭一（新潟県文化財保護指導委員）

調査事務局 長岡市教育委員会社会教育課（課長 松井登喜男）

調査作業員 地元有志

調査に御指導・御協力をいただいた方々

小熊博史 小林達雄 戸根与八郎 原田昌幸 広井造 藤田富士夫 本間信昭

関原地区町内会 日越地区町内会 長岡市立希望が丘小学校

南原遺跡

The Minamihara Site

平成6年3月30日印刷 平成6年3月31日発行

発行：長岡市教育委員会
